菊塗井雙紙

中

初扁

208
12
682

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

凌霜菊廼井雙紙巻之二

俚談

江戸　爲永春水著

第三回

白馬騎て行ぜ章臺楊柳折ると賦ー

たら八盛唐の代の少年行白馬馳ん

誰くぞ。山谷通ひの土手を

辿りて。麦よ猛よも窟彼の簡仲が女

閭七百軒公らべし青樓妓院余行の音

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

あるよそほひて幣間奇伎が仏手指の数々を置き。
たゝや昼居も引」け酒宴ハ軒端くよゝ打て物こゝよ
る門牙の新肉ぶーの妙る汁ハ梁の塵も靡よ
べく金魚拌の魚もおそべく覚香。まこなのもろん漫
言のひて。飽ク腎く漢のいと頸こる教ハ小て。挟
る祝ところ文いよ客のおうーげる汁ハ花草の頭こも
解んろ青粉」と糸ぶくくろ。ハ鮪てふもの、異名
ふて。小元管ク扇よけて。煙草うる男ハこび

教の仰ともこゝろまくぐけ是ども。こゝ元さこゝ嶋
そゞめて賢ゝ人ふハ知ろく真こ見ゝ流
行河合辞更ゝ餘の国ろ峡時ハ見ゝ是ゞ峡
ゝ是ず。是呼渭昌幸の楽国悠雲の仙教みて。
お言ク著せ」楊雄もいまこゝろず。河源ク極
め」張騫もあゝ行ぎ。奇こ妙くこる廉の光景。
抜き筆よ尽ーがる派こひの手ゆも上
ぶ上ゝ中品中生下ぶの三ゆあり大所ハ則ち

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

上品上生又半籬ハ中品中生そをとうふハ下品下生客もそをとうく異くる考ふ凡そのことくさ〳〵のぞき悪ひのみてまぐるもあり。赤豆卑よ通ふのと飛ぶ凡て引つたら豆せん方〳〵よまくもあり或ハ籬の蔭よる指さ面をかくし〳〵蜜ことわざくる情人ことを凡ゑ。塗よふそをて顔ゑ膝よ入まて物ゑ〳〵げるハ待客あると覚香。老ふるも若きも賢きもあるもの。のをとふらぬ

迷ひの道。誰が世よことをふる冰踏みて参ふ名所の山科屋と。呼〳〵家ハとをふ死全盛の君達多く客人のことまふさそよるふりけり。昼ま毎ふる寂莫と。間毎くも静ふる新造衆ハおどろくのもの夏ことハのひぐらし。男よ凡甚ふるも余化粧も会文まてせねばふらぬと。のをと美〳〵ぐるもありまことニ人が。ふてハ晩ふ来ま客が。約束でござりまするが。どのでまねばよのゝト

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

観音さまをおがんぢう。喞國あそうの業まをを當まとびおきまて歩まて。斟しのこのおつしきをこらく。
王でおまつぐさるんの真でやまもいこすうぬなまご豆い。
別源の一人づつも。もとめるとハ廿ず人の名代
よ出るだろうが。能でハごぎんせぬと。婦女郎の妻
よ。嵐蘭して衣折る。小袖をめばま一人のハ。鏡
盞もくちそこらおかごづけまうごいたがき。
折〳〵も唐よどよめくハ。のもまも廊へきてるう音妙

さんと褌名もる。陽湯師ふぞありけるが。かまハ
仰の国の人まて又何くそ仰ぐこと
今日まで日毎よ此庵が窪へ来りつく待人矣物
呼ぢとて當らずとのふ真つく等元の物よ亜
ぎるぐどくうる古多よ。人語音妙ありことて。誰ぶ
いまとうく音妙くと呼つて。その処全とちら
ぎとのこども又音妙とねべば巳が真とて。その

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

招ぎよ。無ぞうりのみらうこと。此所よまねくまで。
物くとト世。銭米うんどと。贈り。あく人酒飯うでこと
ふるまへども。おくてこと。彼の物知者ぎ。彼の無慾
の狂人ふりとりさて。彼が来る毎よ。のぞき
の客ぬても大勢ふろう法どこて勘考公をへんと
うるぶ。今山科笹の庵よ。彼の奇妙ぎ来りけ程よ。
剣のごく我造秀若イ者ふんどこまくよ。招ぐ
のるとと。世そのい所のこぶぎろう警歎して

どうあくおぞおりける。愛よ此山科やの梢残樹と
ぎくく。菊の井といふ大き。
きのこるず。深く文学ふ通じ。和ごとよくく琴を
好き。そのく志操の高きる。貴人ふ位の娘ぎ。
おきくおこうず。かくれ。童の高き女ふこと。並く
の着よ肌公あるさでと。来る客毎よいと強面のく
ふこうせくうぶ。まこと返ってと。実面白くおぎく。
家こそ実の情よあづらんものと。茅客鏡よて

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

らもあるりや今月ことし愛でふあるまい
うことゞべいとかうやと演員よりも女子気よ菊河
何ことうぐきめうね「ヨトよの
のもの奇妙さんが本て新造しもがいろくる吉公
うそうらそのまひが考ふあの申る夏をべけて
て終よ古しまうことばりそのらうこぐも左
狙よ気よかるうらうんとアノ奇妙さんそのの
吉凶公月そのらんせのうトば菊の井お熊民

きく「うわど占といふものハ伏儀よおこり聖人も易
を述のひーろ吐伎よ立うるもの彼の漢の未うる
管轗戎日の本のむ〳〵伴の別當それらいらの
のさんの巫女うんどうろくそ彼の立こうる人の耳
目と驚かすこと多々ゑ尽ハ今氏易ホがの所の奇妙
と申うんが並郷も赤徑ることかさーとのうんろまづ
今月よ我部屋へそのの奇妙をべ呼て申人正と
月こうくみてトと占てそ今月見てる夢の吉凶易ね

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

べ〳〵いざ〳〵くと菊の井が。得よもろこび菊まちハ
疾く出来て寄妙をバとまるの二階へ連ねり

第四回

抔彼の寄妙と卓号せらるゝ者が窪まて浮世と
渡る占卦者ぶあるときゝハ身の程六十斗りの乳だ
童頽雇婆ぶして嬰児のごく負て麻の乃衣を
着〳〵白紀髪父右のまよみぎりあめるきゝく
菊の井が。永屋よりハ菊の井敬〳〵

茶泉のゆてる〳〵すこそこゝろ今正ごと見こりけろ
夢のおらまゝめがこの其ごろ丙ごそ同ふまて寄
妙ハおぶゝめくねんとさゝ〳〵うむのて一盛家時着
をとりロの内よ坐文父とろ人卦父ふて見てよきま
おどろき菊の井よむろひめりそろ人氏爰ハこまこ其
爰ふて此爰を目前爰よ見こる
ちり。おうそ爰よさ爰ぐの差別あり同後のまま爰
よ六爰のエと彼り今ろ見ぶ見こるハ〳〵く二爰

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

ホーて日ごろずゐぶん一人の好男子よめぐりあひ。
こまごまと深くちぎりの口ひ君く死よいさらんとす。去
まごころまも前生ごうの宝ものうまこバ人力の
およぶべき呼よあらず則今九んごる。彼の出男よ愚
ごろる男こそ。行末ハ男が情人ホて。こまこがあよ一生
とあやまり。まこさきぐくの憂をとりく。終よ夫婦
うるまでハいとゞやうるべく。ごのごうず
おせごう出男が実現世ホそ再び出男よ愚

ごそ。彼のおせごろ客ホと二人が中ときるこぐく。
こまでも前生の約束うまこバ如何ともせんごるーと。
ごろ出ホこそ菊の井ハ彼一かゝぬト着の相半ばハ
信ど半ハ疑ひ。一決せざる呼へ仲の子の孫ホ座
より「モシ菊町さん。ちごこの新造菊町ごまと
が茶座の男ハあごとひそあ茶や「ヨごこーごこの一客
うる桃酒やの若旦那。小七さるごとのお方菊の井ご
よお逢ひうまこまこごろ。伯母ぞよ今青のおきやくホト

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

のみの菊町うもうるづき菊町「幸ひ今宵八幡宮の
客ぶりけるとそのお方と。とくく張ひのくうし。ひるかハ
妾こゝろもせうよ。先きたらひやさんと。返言よ。飯ぶやや
よろこびて。花がごくよ引返す。菊町ちやーきく五
どん庭。云云のうと噂けバ菊の井そこと手踏沢
狩も奇妙の翁よもひ。泰西公。とうん
とするよ奇妙若人。云べんと左右よおふりて妻しく
こゝと従んあハ天機公漏らすよ似るるまでぞ。

洋小汝よ示しがこて後よ自ら思ひあこらんさら
などのひて社ともらひ。顛々然と立ちまるほ
絵そて廓よ来うず。あゝて私分れぜりしうがる
ある輩ハさてハ彼の奇妙こそ虚公の類ひよしそ。
滴仙うるべと得しあうしぞ〇夫ハ備あを
中肘の辺りよ掛酒やのかへ。少年湯と呼ぶる。有徳うる町
人あり這少年原ハ名そきき者うりがいぐるる
ふや。ありよ有徳うる人とうりて大きまうる家と

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

かくて呉服の小高ひとをたづめるが四ひの外よ
り貸しき着ふせ金
と貸して。その利足をさとりて。家業の助
けとする物ぞ。たゞ十年あまりよ此辺りよ並ぶ
かこの冥加とぞりよけ皆人皆喜びて中々の
お安とて四ずぞの妻ハ
お源とひて小三郎と六年すぎぬ三
十ぞうぞう。彼ぞよ二人の子あり兄ハ小

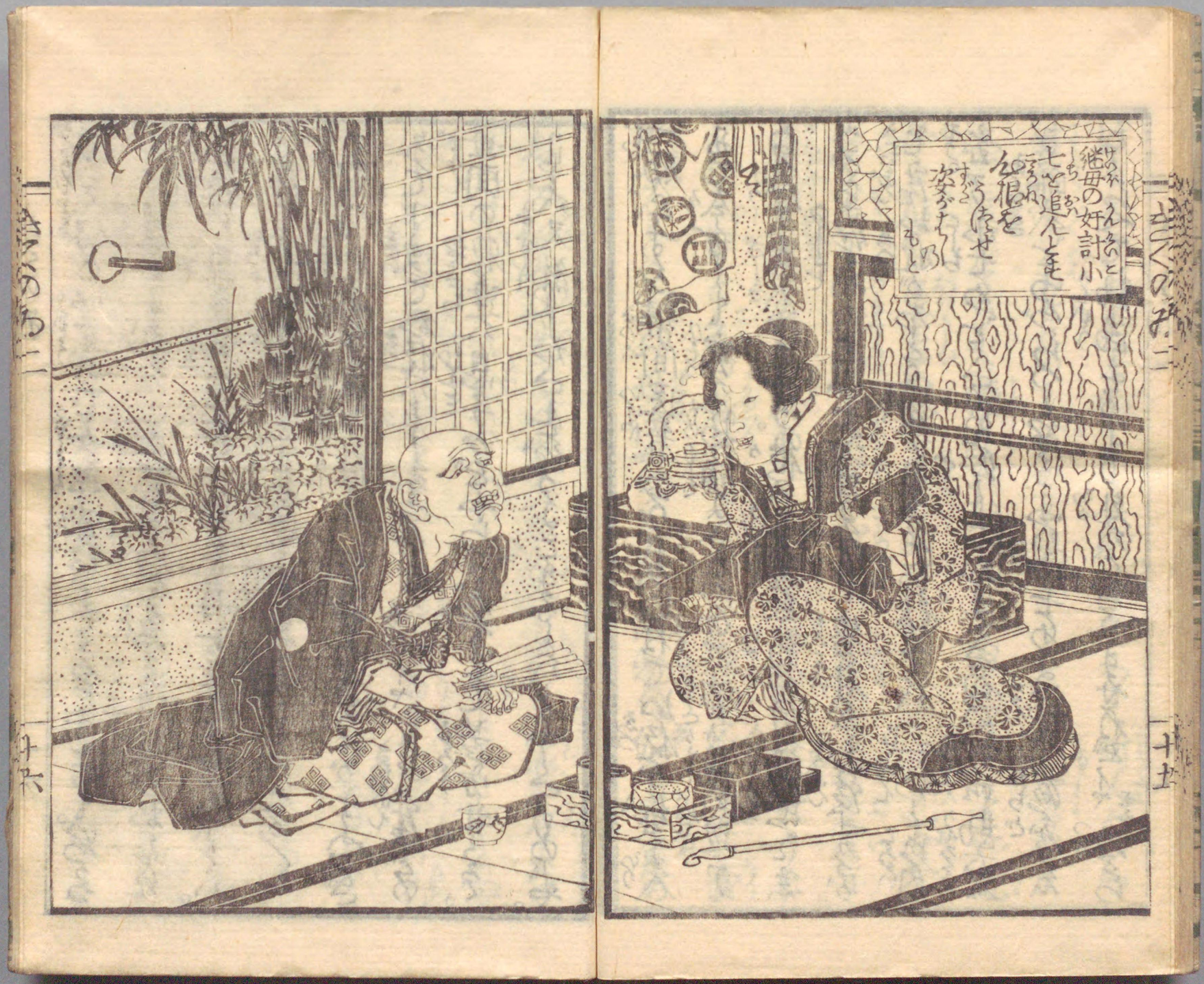
七とて廿二戈ぞうぞう妹ハおせんとて十六戈ぞうが小
七ハ本妻の子ぞ。おせんハ妾のお源が産ぞりけ
ば。おのづと小七と憎み彼の幸ぞ家を
つぶさばやと思ふぞう。永助ぞうめるおせんよ勘六とひめるもの
密よ母代として家のる父ぞ。あくまで
彼お仙が聟よせんとおもひ
ぬる父密よ物ぞう彼せ。ぞうぞまゐぞうぞ
ぞう廿せけぞ程よ。あるじも勘六
ハ二ぞ老ぞ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

けるゝあるに小七ゝゝ
猶文学文ことのゝ日毎ゝ
ゝて露ぞうも洩ゝ
冊も彼ゝ退ゝべき
くる実ゝ
唐林七屋ゝ
くゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

町人ゝ
ゝ
ゝ
月日ゝ
ゝ
ゝ



国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

学文好の性質で女郎買分までもやめて
くく故女よ恋のー宮分もやめて
川何の流と女よ家とこまを五ー月と五るでい。
いろて名の文ぶやと。名乗とて番でありとの。ろく
名乗が七ふも病人。隆人へお
ろて下さて仕八本ぐよ「イヤノウ七屋どの
世間の就達ハ息子がどふらくぶやとて若労せろて。
ヒー八又餘りかこまぐろよこまるとハよふこものや。

きぐがなど妙業とのふよう言文でろふ左楽者よう
よる古文おくば。金八いわど妙
なとおまくの立風八あるまいうト。ゆて原来懸命の七
あ屋とかきろぐら七「そ五八ぬ。ろ「ふそんろら
七世バまな妙業のうのでもごぎりませ
金きくんと出てきろ分旅業があるとのろよや
ろと「あるともく」ぶのぶんごぎりまん「そ五八ぬ
よの名安いる。シテ又のら狂ぐ五世バまな業が網八ま

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

まする七「イヤいくらと申て世よ稀なる某の面へ小判で
てうど五千両おろう百両でもあのつめ
とくそれ以上の種ようそんなうまくとさ
おまへさまが国元の方へ行けばとても
あんどおもろと後のうまい事を推し
ちょっとこの二階のお客の姿が
様もあげさんのべっぴんや風分の
のこの二人の私文六ずだろうと
やどきゃこのごろらくとせしとする行
勘定は一人の老女おのしも美の
七八枚もうるとそこのお札を
おもろひ

ようと下さらぬうと下のくだ
再びふも進ぜる支ぐ
やうるお客との犯仁じ
張ってそれ。ある主の
及び便戦村の畑作
る二人りの子がごぎりま
て。根性の西方でち
十八の年国父七命。

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

既に食事もそこそこに
きこ「ねえさんが縁談のお菊ちゃまざまその後いかがでございますか。」
「ええ、もうくと十一でございますよ。」
「行き先きはどこどこ」
「ええ、あの崖と申して。」
「爺さんの雑木林を抜けて、少し行くと後ろは小高い山になっていて、その麓に小さい池がございますよ。」

「実に美人と申し方もお菊とは。」
「ええ、あの崖へつとめ奉公その金で命をとりとめ、今ではこちらでの評判のお嬢さまでございますよ。」
「ええ、あの崖へ参ると菊の井という清水が湧いておりまして、今でもその花弁を浮べる

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おもて。如何さまの事も凡そ光る衣被きて
居をつこる也でござんのお主が主君也でおらふ
おやモウかなしうてくやしうて涙ところ〳〵まくら〳〵が婆めが
さぞまつて居おろふと。そこのでおどろきまごら孫娘
うる家よおつこひ女給八則娘が姿絵と浮世繪
師が書こものよ似て居る而已よ婆めよ凡せうまこ
おもて。勉くうて戻つこの而已ぞふす進ぜるぞ
うりゃうござるト。さすが男の上ぞ
イヤモウ

気位のく。ひまご計孫めがこんもくへ出るのうけと。
出ぶつのよへおとびませあれ。ちつとも早くおまへ
おくうさまませトのべ
入ましよ不思議
吹まり畑作がまよ持
風よおでの虚空遥う
うりうらへいとすま怪しきまよ
ところ〳〵婆ぬうりうぐ
いとおやしこうぐら家路へぞうくる

○廿日小七八獨り已が

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

へ紙屋の窓のもとに文をむすび蒙求の孟光が荊釵とのふ線なよみてをりひけるに家もものとぞ孟光が如き賢妃妻をえてどもさりとて餘りつゝ見ふくきに女と推ろんもいつぐるり。戈色お今の女あらんもふ。そもそも我望至りとおもふ所きと吹風と彼こそ一枚の絵もくと書そ。小七が儘元よりもちろる小七のかく取とて。見るよ浮世絵師の筆分ふひ〳〵ものと見へ美な

仮城の姿絵もて意ず窪山科盆内菊の井とそ
くうんまバ。小七ハ法らくとうつ。世ハかる美婦人もあるものうるとけるいとも怪き縁みゝとのべ。

菊廼井草紙巻之二終

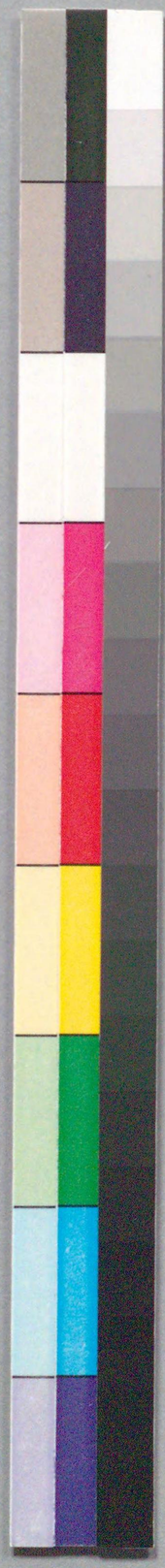
国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

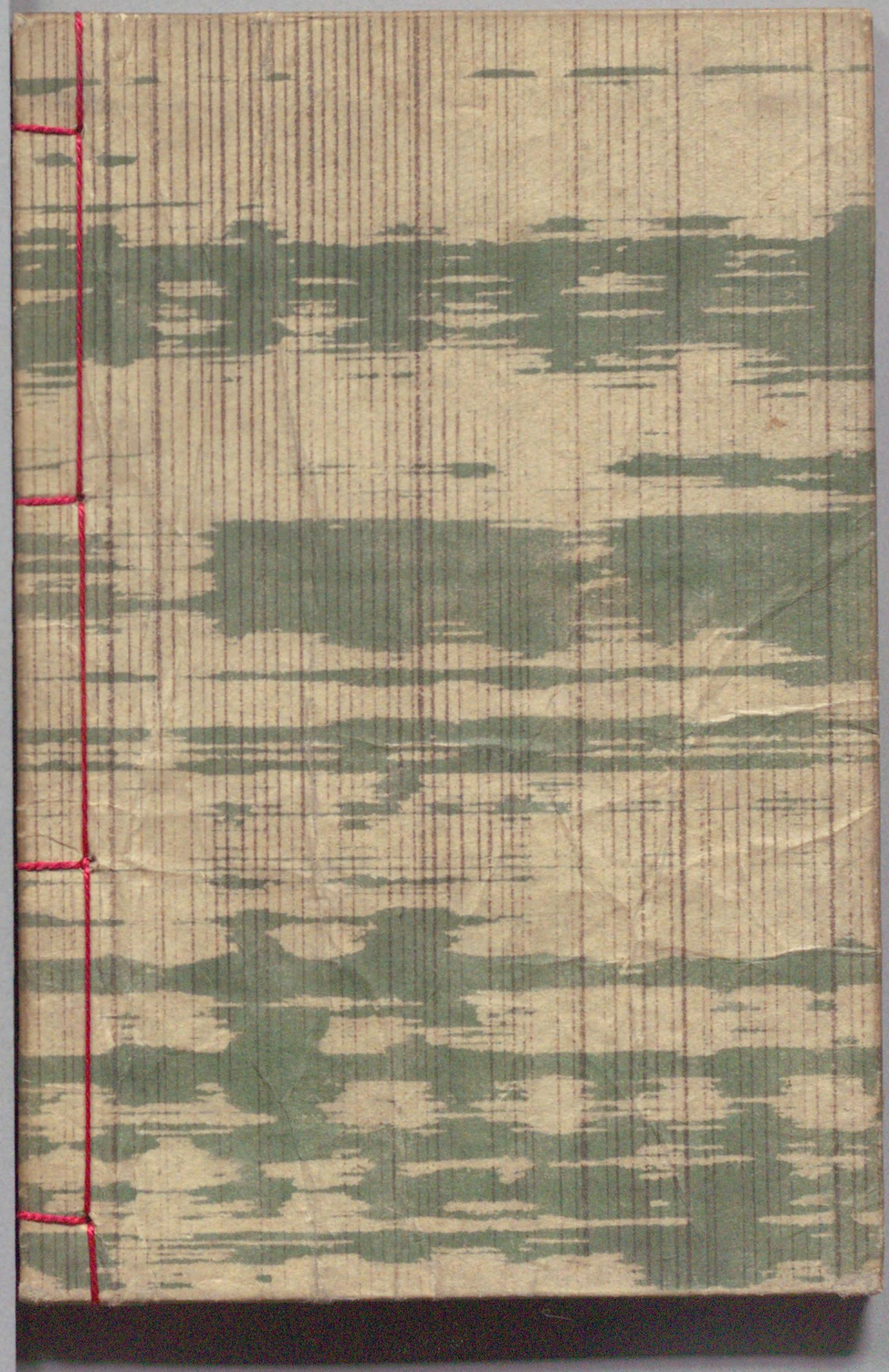
ガラス使用

208
12
682

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用





国立国会図書館　　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用